日汉对照名家经典作品

心

こころ

[日] 夏目漱石 著

林少华 译

中国宇航出版社

日汉对照名家经典作品

心 こころ

[日] 夏目漱石 著

林少华 译

中国宇航出版社

·北京·

版权所有　侵权必究

图书在版编目（CIP）数据

心/（日）夏目漱石著．林少华译．—北京：中国宇航出版社，2008.5

（日汉对照名家经典作品）

ISBN 978-7-80218-360-5

Ⅰ．心… Ⅱ．①夏…②林… Ⅲ．①日语—汉语—对照读物②长篇小说—日本—现代 Ⅳ．H369.4：I

中国版本图书馆 CIP 数据核字（2008）第 040777 号

策划编辑　楚晓琦　　封面设计　03 工舍
责任编辑　楚晓琦　　责任校对　梁月红

出版发行　中国宇航出版社
社　址　北京市阜成路 8 号　　邮　编　100830
(010)68768548
网　址　www.caphbook.com/www.caphbook.com.cn
经　销　新华书店
发行部　(010)68371900　　(010)88530478(传真)
(010)68768541　　(010)68767294(传真)
零售店　读者服务部　　北京宇航文苑
(010)68371105　　(010)62529336
承　印　三河市君旺印装厂
版　次　2008 年 5 月第 1 版　　2008 年 5 月第 1 次印刷
规　格　880×1230　　开　本　1/32
印　张　12.5　　字　数　358 千字
书　号　ISBN 978-7-80218-360-5
定　价　24.80 元

本书如有印装质量问题，可与发行部联系调换

夏目漱石和他的作品（代译序）

林少华

除了对职业教师，日本人一般不以“先生”称呼别人，对文学家也是这样。但对夏目漱石是个例外，习惯上称为“漱石先生”，大约同我们中国人习惯上称鲁迅为“鲁迅先生”相若。较之客气，这里边显然含有尊之为师的敬意。实际上，夏目漱石在日本人心目中的地位也同鲁迅在中国人心目中的地位差不多。但鲁迅研究，无论在中国还是在日本都属于显学。不仅《鲁迅全集》被一篇不少地译成了日文，《故乡》还被收入了日本中学“国语”（语文）教科书——不知道鲁迅先生的日本人估计占不到多数。但相比之下，夏目漱石在中国就没有那么幸运了（当然个中原因多多，很难单纯比较）。人们或许知晓川端康成和大江健三郎，但知道漱石的，除了大学中文、外文系师生和文学爱好者，恐怕不会有多少人。

然而毫无疑问，漱石是日本近代文学史上一座卓然特立的高峰。他活跃的 20 世纪初期（明治与大正之交），日本文坛可谓群星灿烂。就小说家来说就有森鸥外、岛崎藤村（亦是诗人）、田山花袋、正宗白鸟、永井荷风等人。但作品至今仍为人津津乐道的，说得夸张些，恐怕唯漱石一人而已。难怪被日本人称为“国民大作家”，其头像赫然印在日本千元纸钞的正面，人们几乎无日不同这位大作家“打交道”。

夏目漱石，原名夏目金之助，1867 年（庆应三年）生于江户（现东京）一小吏家庭，14 岁入二松学舍系统学习“汉籍”（中国古籍），浸润了东方美学观念和儒家伦理思想，奠定了日后文学观和人生观的基础。写“汉诗”（汉语古诗）是其终生爱好和精神寄托。“漱石”之名，即出自《晋书·孙楚传》中“漱石枕流”之句。21 岁就读于第一高等中学本科，23 岁入东京帝国大学（现东京大学）英文专业学习。其间因痛感东西方文学观的巨大差异而陷入极度的精神苦闷之中。1895 年赴爱媛县松山中学任教，为日后《哥

儿》的创作积累了素材。翌年转赴熊本县任高等中学讲师。1899年赴英国留学三年，学习英国文学和教学法。回国后先后在东京第一高等中学和东京帝大讲授英文，同时开始文学创作，发表了长篇小说《我是猫》，并一举成名。1907年进入朝日新闻社任小说专栏作家，为《朝日新闻》写连载小说，一直笔耕不辍，直至1916年（大正五年）因胃溃疡去世。是年仅49岁。

漱石从事文学创作的时间并不很长，从38岁发表《我是猫》到49岁去世，也就是十年多一点时间，却给世人留下了大量有价值的作品。他步入文坛之时，自然主义文学已开始在日本流行，很快发展成为文坛主流。不过日本的自然主义不完全同于以法国作家左拉为代表的欧洲自然主义，缺乏波澜壮阔的社会场景，缺乏直面现实的凌厉气势，缺乏粗犷遒劲的如椽文笔，而大多囿于个人生活及其周边环境的狭小天地，乐此不疲地直接暴露其中阴暗丑恶的部位和不无龌龊的个人心理，开后来风靡文坛（直至今日）的“私小说”、“心境小说”的先河。具有东西方高度文化素养的漱石从一开始便同自然主义文学背道而驰，而以更广阔的视野、更超拔的高度、更有责任感而又游刃有余的态度对待世界和人生，同森鸥外一并被称为既反自然主义又有别于“耽美派”和“白桦派”的“高踏派”、“余裕派”，是日本近代文学真正的确立者和一代文学翘楚。随着漱石1916年去世及其《明暗》的中途绝笔，日本近代文学文学也就落下了帷幕。

以行文风格和主要思想倾向划线，作品可分为明快、“外向”型和沉郁、“内向”型两类。前者集中于创作初期，以《我是猫》（1905）、《哥儿》（1906）为代表，旁及《草枕》（1906）和《虞美人草》（1907）。在这类作品中，作者主要从理性和伦理的角度对现代文明提出质疑和批评。犀利的笔锋直触“文明”的种种弊端和人世的般般丑恶。语言如风行水上，流畅明快，幽默如万泉自涌，酣畅淋漓，妙语随机生发，警句触目皆是，颇有嬉笑怒骂皆成文章之势。后者则分布于创作中期和后期，主要作品有《三四郎》、《其后》、《门》（前期三部曲）和《彼岸过迄》、《行人》、《心》（后期三部曲），以及绝笔之作《明暗》。在这类作品中，作者收回伸向社会的笔锋，转而指向人的内心，发掘近代人内心世界的

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

不安、烦恼和苦闷，尤其注重剖析近代知识分子的“自我”、无奈与孤独，竭力寻觅超越“自我”、自私而委身于“天”的自在和谐之境（“则天去私”），表现出一个作家应有的社会责任感和执著、严肃的人生态度。

这里，从两类作品中各选一部代表作。《哥儿》通过一个不谙世故、坦率正直的鲁莽哥儿踏入社会后同周围俗物展开的种种戏剧性冲突，辛辣而巧妙地讽刺了社会上的丑恶现象，鞭挞了卑鄙、权术和虚伪，赞美了正义、直率和纯真。行文流畅，节奏明快，形象鲜明。通篇如坂上走丸，一气流注，而寓庄于谐，妙趣横生，至今仍是脍炙人口的作品，实为日本近代文学作品中不可多得的佳作。《心》则多少带有现今所说的推理色彩。“我”认识了一位“先生”，后来接得“先生”一封长信（其时“先生”已不在人世），信中讲述了“先生”在大学时代同朋友K一同爱上房东漂亮的独生女儿。“先生”设计使K自杀，自己如愿以偿。但婚后时常遭受良心和道义的谴责，最后也自杀而死。小说以徐缓沉静而又撼人心魄的笔致，描写了爱情与友情的碰撞、利己之心与道义之心的冲突，凸现了日本近代知识分子矛盾、怅惘、无助、无奈的精神世界，同时提出了一个严肃的人生课题。这部长篇可以说是漱石最为引人入胜的作品，至今仍跻身于日本中学生最喜欢读的十部作品之列。说得极端一点，假如没有《哥儿》和《心》，漱石能否“活”到今天还真是个疑问。

日本小说家中，较之诺贝尔文学奖获得者川端康成和大江健三郎，我更喜欢另外两个人：一个就是夏目漱石，一个是当代的村上春树。差不多二十年前在北国读研究生的时候，漱石全集便读了一集又一集；而村上的小说，近年来则译了一本又一本。粗想之下，两人之间虽时隔八十余年，但确有若干共同点。一是态度的认真与坦诚。两人都认真对待人生和社会，不伪善，不矫情，不故弄玄虚，不掩饰自己。二是笔调的幽默和机警。一些作品都富于理性的、机智的、有教养的幽默感。外国有人称村上春树为“当代的夏目漱石”，想必主要着眼于这一点。三是描写对象大多都是都市里的小人物尤其是知识分子，都以传达其孤独、无奈、充满失落感的心态见长，而且两人同样是游离于文坛主流而独树

一帜、别开生面的作家。

正因为喜欢，多年来一直想将适合日语专业大学生课外阅读的《哥儿》和《心》这两篇以日汉对译形式另行付梓。而今承蒙中国宇航出版社好意，终于得遂夙愿。人生快事，教师之乐，莫过于此。

关于注释，主要根据本科二三年级的学力就词汇和语法之偏难者附以底注。释义参考了角川书店昭和49年版“日本近代文学大系”之《夏目漱石集》中的注释和有关辞书，亦多少有我个人的理解。包括译文在内，未必精当，谨资参考，欢迎指正。

2008年3月20日于窥海斋

时青岛垂柳初绿迎春花开

目录

こころ 1
上　先生と私 3
中　両親と私 84
下　先生と遺書 125

心 251
上　先生与我 253
中　双亲与我 302
下　先生与遗书 326

UNO

上　先生と私

一

私はその人を常に先生と呼んでいた。だからここでもただ先生と書くだけで本名は打ち明けない。これは世間を憚かる遠慮というよりも、その方が私にとって自然だからである。私はその人の記憶を呼び起すごと[1]に、すぐ「先生」といいたくなる。筆を執っても心持は同じ事である。よそよそしい[2]頭文字[3]などはとても使う気にならない。

私が先生と知り合いになったのは鎌倉である。その時私はまだ若々しい書生であった。暑中休暇を利用して海水浴に行った友達からぜひ来いという端書を受け取ったので、私は多少の金を工面[4]して、出掛ける事にした。私は金の工面に二、三日を費やした。ところが私が鎌倉に着いて三日と経たないうちに、私を呼び寄せた友達は、急に国元から帰れという電報を受け取った。電報には母が病気だからと断ってあったけれども友達はそれを信じなかった。友達はかねてから国元にいる親たちに勧まない結婚を強いられていた。彼は現代の習慣からいうと結婚するにはあまり年が若過ぎた。それに肝心[5]の当人が気に入らなかった。それで夏休みに当然帰るべきところを、わざと避けて東京の近くで遊んでいたのである。彼は電報を私に見せてど

---

① ごと：［接尾］接于名词和动体连体形之后。每，每当，每次，每回。
② よそよそしい：［形］生分的，见外的，有隔阂的，疏远的，冷淡的。
③ 頭文字：第一个字母，第一个字。
④ 工面：［形・他サ］设法安排、筹措（钱款等）；经济状况，手头是否宽裕。
⑤ 肝心：［形の］极重要的，关键的，宝贝性质的。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

うしようと相談をした。私にはどうしていいか分らなかった。けれども実際彼の母が病気であるとすれば彼は固より帰るべきはずであった。それで彼はとうとう帰る事になった。せっかく来た私は一人取り残された。

学校の授業が始まるにはまだ大分日数があるので鎌倉におってもよし、帰ってもよいという境遇にいた私は、当分元の宿に留まる覚悟をした。友達は中国のある資産家の息子で金に不自由のない男であったけれども、学校が学校なのと年が年なので、生活の程度は私とそう変りもしなかった。したがって一人ぼっちになった私は別に恰好な宿を探す面倒ももたなかったのである。

宿は鎌倉でも辺鄙な方角にあった。玉突きだのアイスクリームだのというハイカラなものには長い畷①を一つ越さなければ手が届かなかった。車で行っても二十銭は取られた。けれども個人の別荘はそこここにいくつでも建てられていた。それに海へはごく近いので海水浴をやるには至極②便利な地位を占めていた。

私は毎日海へはいりに出掛けた。古い燻ぶり返った藁葺の間を通り抜けて磯へ下りると、この辺にこれほどの都会人種が住んでいるかと思うほど、避暑に来た男や女で砂の上が動いていた。ある時は海の中が銭湯のように黒い頭でごちゃごちゃしている事もあった。その中に知った人を一人ももたない私も、こういう賑やかな景色の中に裹まれて、砂の上に寝そべってみたり、膝頭を波に打たしてそこいらを跳ね廻るのは愉快であった。

---

① 畷：田梗，田间小路；又直又长的小路。
② 至極：［副］しごく。极，极其，最，最为。

私は実に先生をこの雑沓の間に見付け出したのである。その時海岸には掛茶屋が二軒あった。私はふとした機会から①その一軒の方に行き慣れていた。長谷辺に大きな別荘を構えている人と違って、各自に専有の着換場を拵えていないここいらの避暑客には、ぜひともこうした共同着換所といった風なものが必要なのであった。彼らはここで茶を飲み、ここで休息する外に、ここで海水着を洗濯させたり、ここで鹹はゆい身体を清めたり、ここへ帽子や傘を預けたりするのである。海水着を持たない私にも持物を盗まれる恐れはあったので、私は海へはいるたびにその茶屋へ一切を脱ぎ棄てる事にしていた。

二

私がその掛茶屋で先生を見た時は、先生がちょうど着物を脱いでこれから海へ入ろうとするところ②であった。私はその時反対に濡れた身体を風に吹かして③水から上がって来た。二人の間には目を遮る幾多の黒い頭が動いていた。特別の事情のない限り④、私はついに先生を見逃したかも知れなかった。それほど浜辺が混雑し、それほど私の頭が放漫であったにもかかわらず、私がすぐ先生を見付け出したのは、先生が一人の西洋人を伴れていたからである。

その西洋人の優れて白い皮膚の色が、掛茶屋へ入るや否や、すぐ私の注意を惹いた。純粋の日本の浴衣を着ていた彼は、それを床几の上にすぽりと放り出したまま、腕組みをして海の

---

① から：［接助］此处表示原因。出于，基于，由于。
② ところ：［形式名］“～しようとするところ”，就要，正要，将要，即将。
③ 吹かして：“未然形+す”，同“未然形+せる·させる”，表示使役。让，使，叫。
④ 限り：“～しない限り”，只要，除非。

方を向いて立っていた。彼は我々の穿く猿股一つの外何物も肌に着けていなかった。私にはそれが第一不思議だった。私はその二日前に由井が浜まで行って、砂の上にしゃがみながら、長い間西洋人の海へ入る様子を眺めていた。私の尻をおろした所は少し小高い丘の上で、そのすぐ傍がホテルの裏口になっていたので、私の凝としている間に、大分多くの男が塩を浴びに出て来たが、いずれも胴と腕と股は出していなかった。女は殊更肉を隠しがちであった。大抵は頭に護謨製の頭巾を被って、海老茶や紺や藍の色を波間に浮かしていた。そういう有様を目撃したばかりの私の眼には、猿股一つで済まして皆なの前に立っているこの西洋人がいかにも珍しく見えた。

彼はやがて自分の傍を顧みて、そこにこごんでいる日本人に、一言二言何かいった。その日本人は砂の上に落ちた手拭を拾い上げているところ①であったが、それを取り上げるや否や、すぐ頭を包んで、海の方へ歩き出した。その人がすなわち先生であった。

私は単に好奇心のために、並んで浜辺を下りて行く二人の後姿を見守っていた。すると彼らは真直に波の中に足を踏み込んだ。そうして遠浅の磯近くにわいわい騒いでいる多人数の間を通り抜けて、比較的広々した所へ来ると、二人とも泳ぎ出した。彼らの頭が小さく見えるまで沖の方へ向いて行った。それから引き返してまた一直線に浜辺まで戻って来た。掛茶屋へ帰ると、井戸の水も浴びずに、すぐ身体を拭いて着物を着て、さっさとどこへか行ってしまった。

彼らの出て行った後、私はやはり元の床几に腰をおろして烟草を吹かしていた。その時私はぼかんとしながら先生の事を考えた。どうもどこかで見た事のある顔のように思われてな

---

① ところ：［形式名］“～しているところ”，正，正在。

らなかった①。しかしどうしてもいつどこで会った人か想い出せずにしまった。

その時の私は屈托がないというよりむしろ無聊に苦しんでいた。それで翌日もまた先生に会った時刻を見計らって、わざわざ掛茶屋まで出かけてみた。すると西洋人は来ないで先生一人麦藁帽を被ってやって来た。先生は眼鏡をとって台の上に置いて、すぐ手拭で頭を包んで、すたすた浜を下りて行った。先生が昨日のように騒がしい浴客の中を通り抜けて、一人で泳ぎ出した時、私は急にその後が追い掛けたくなった。私は浅い水を頭の上まで跳かして相当の深さの所まで来て、そこから先生を目標に抜手を切った。すると先生は昨日と違って、一種の弧線を描いて、妙な方向から岸の方へ帰り始めた。それで私の目的はついに達せられなかった。私が陸へ上がって雫の垂れる手を振りながら掛茶屋に入ると、先生はもうちゃんと着物を着て入れ違いに外へ出て行った。

三

私は次の日も同じ時刻に浜へ行って先生の顔を見た。その次の日にもまた同じ事を繰り返した。けれども物をいい掛ける機会も、挨拶をする場合も、二人の間には起らなかった。その上先生の態度はむしろ非社交的であった。一定の時刻に超然として来て、また超然と帰って行った。周囲がいくら賑やかでも、それにはほとんど注意を払う様子が見えなかった。最初いっしょに来た西洋人はその後まるで姿を見せなかった。先生は

① ならなかった：［连语］“～で·で·してならない”，～得不得了，～受不了，非常。

いつでも一人であった。

或る時先生が例の通りさっさと海から上がって来て、いつもの場所に脱ぎ棄てた浴衣を着ようとすると、どうした訳か、その浴衣に砂がいっぱい着いていた。先生はそれを落すために、後ろ向きになって、浴衣を二、三度振った。すると着物の下に置いてあった眼鏡が板の隙間から下へ落ちた。先生は白絣の上へ兵児帯を締めてから、眼鏡の失くなったのに気が付いたと見えて、急にそこいらを探し始めた。私はすぐ腰掛の下へ首と手を突ッ込んで眼鏡を拾い出した。先生は有難うといって、それを私の手から受け取った。

次の日私は先生の後につづいて海へ飛び込んだ。そうして先生といっしょの方角に泳いで行った。二丁①ほど沖へ出ると、先生は後ろを振り返って私に話し掛けた。広い蒼い海の表面に浮いているものは、その近所に私ら二人より外になかった。そうして強い太陽の光が、眼の届く限り水と山とを照らしていた。私は自由と歓喜に充ちた筋肉を動かして海の中で躍り狂った。先生はまたぱたりと手足の運動を已めて仰向けになったまま浪の上に寝た。私もその真似をした。青空の色がぎらぎらと眼を射るように痛烈な色を私の顔に投げ付けた。「愉快ですね」と私は大きな声を出した。

しばらくして海の中で起き上がるように姿勢を改めた先生は、「もう帰りませんか」といって私を促した。比較的強い体質をもった私は、もっと海の中で遊んでいたかった。しかし先生から誘われた時、私はすぐ「ええ帰りましょう」と快く②答えた。そうして二人でまた元の路を浜辺へ引き返した。

---

① 二丁：正确写法为“二町”。町，这里为长度单位，约109米。
② 快い：［形］こころよい。高兴，愉快；痛快，爽快。

私はこれから先生と懇意①になった。しかし先生がどこにいるかはまだ知らなかった。

それから中二日おいてちょうど三日目の午後だったと思う。先生と掛茶屋で出会った時、先生は突然私に向かって、「君はまだ大分長くここにいるつもりですか」と聞いた。考えのない私はこういう問いに答えるだけの用意を頭の中に蓄えていなかった。それで「どうだか分りません」と答えた。しかしにやにや笑っている先生の顔を見た時、私は急に極りが悪くなった。「先生は？」と聞き返さずにはいられなかった。これが私の口を出た先生という言葉の始まりである。

私はその晩先生の宿を尋ねた。宿といっても普通の旅館と違って、広い寺の境内にある別荘のような建物であった。そこに住んでいる人の先生の家族でない事も解った。私が先生先生と呼び掛けるので、先生は苦笑いをした。私はそれが年長者に対する私の口癖だといって弁解した。私はこの間の西洋人の事を聞いてみた。先生は彼の風変りのところや、もう鎌倉にいない事や、色々の話をした末、日本人にさえあまり交際をもたないのに、そういう外国人と近付きになったのは不思議だといったりした。私は最後に先生に向かって、どこかで先生を見たように思うけれども、どうしても思い出せないといった。若い私はその時暗に相手も私と同じような感じを持っていはしまいかと疑った。そうして腹の中で先生の返事を予期してかかった。ところが先生はしばらく沈吟したあとで、「どうも君の顔には見覚えがありませんね。人違いじゃないですか」といったので私は変に一種の失望を感じた。

---

① 懇意：［形动］こんい。要好，亲密；亲切，恳切，好意。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook